

# 日蓮大聖人御書全集

じゅうによぜじ

十如是事

新版  
354  
ゝ  
357

じゆうによぜじ

# 十如是事

しょうか ねん

正嘉2年('58)

37歳 さい

わ み さんじんそくいち ほんがく によらい

我が身が三身即一の本覚の如来にてありけることを、

こんきよう と い によぜそう によぜしよう によぜたい によぜりき

今経に説いて云わく「如是相・如是性・如是体・如是力・

によぜさ によぜいん によぜえん によぜか によぜほう によぜほんまつくきようとう

如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等」

もん

文。

はじ によぜそう わ み しきぎよう あらわ そう い

初めに「如是相」とは、我が身の色形に顕れたる相を云

おうじんによらい げだつ けたい

うなり。これを応身如来とも、または解脱とも、または仮諦

い つぎ によぜしよう わ しんしよう い

とも云うなり。次に「如是性」とは、我が心性を云うなり。

ほうしんによらい

はんにや

くうたい

い

これを報身如来とも、または般若とも、または空諦とも云う

さん

によぜたい

わ

しんたい

なり。三に「如是体」とは、我がこの身体なり。これを

ほうしんによらい

ちゅうどう

ほつしよう

じやくめつ

い

法身如来とも、または中道とも法性とも寂滅とも云うな

さんによぜ

さんじんによらい

い

さんによぜ

り。されば、この三如是を三身如来とは云うなり。この三如是

さんしんによらい

余所

おも

隔

が三身如来にておわしましけるをよそに思いへだてつるが、

わ

み

うえ

し

ほけきよう

はや我が身の上にてありけるなり。かく知りぬるを、法華経

覚

ひと

もう

をさとれる人とは申すなり。

さんによぜ

ほん

残

なな

によぜ

この三如是を本として、これよりのこりの七つの如是は

出

じゅうによぜ

な

じゅうによぜ

ひやつかい

いでて、十如是とは成りたるなり。この十如是が、百界に

せんによ

さんぜんせけん

な

おお

も千如にも三千世間にも成りたるなり。かくのごとく多く

ほうもん

な

はちまんほうぞう

い

ひと

の法門と成って八万法蔵と云わるれども、すべてただ一つ

さんたい

ほう

さんたい

ほか

ほうもん

の三諦の法にて、三諦より外には法門なきことなり。

ゆえ

ひやつかい

けてい

せんによ

くうたい

その故は、百界というは仮諦なり。千如というは空諦な

さんぜん

ちゅうたい

くう

け

ちゅう

さんたい

り。三千というは中諦なり。空と仮と中とを三諦という

ひやつかい

せんによ

さんぜんせけん

おお

ほうもん

な

ことなれば、百界・千如・三千世間まで多くの法門と成り

ひと

さんたい

たりといえども、ただ一つの三諦にてあることなり。

はじ

さんによぜ

さんたい

お

しちによぜ

さんたい

されば、始めの三如是の三諦と終わりの七如是の三諦と

ひと

さんたい

はじ

お

わ

いっしん

なか

は、ただ一つの三諦にて、始めと終わりと、我が一身の中の

り ひと もの ふかしぎ 理にて、ただ一つ物にて不可思議なりければ、「本と末とは ほん まつ 究 く 竟 きよう して等 ひと し」とは説き給えるなり、これを「如是本末究竟 によぜほんまつくきよう とう もう 等」とは申したるなり。始めの三如是を本とし終わりの はじ さんによぜ ほん お 七如是を末として十の如是にてあるは、我が身の中の三諦 しちによぜ まつ じゆう によぜ にてあるなり。この三諦を三身如来とも云えば、我が心身 さんたい さんじんによらい い わ しんしん 上 ほか ぜんあく っ 髪 筋 ほう 外には善悪に付けてかみすじばかりの法もなきものを。 わ み さんじんそくいち ほんがく によらい されば、我が身がやがて三身即一の本覚の如来にてはあり けることなり。

余 所 おも しゆじよう まよ ぼんぷ い これをよそに思うを、衆生とも迷いとも凡夫とも云うな

り。これを我が身の上と知りぬるを、如来とも覚りとも

しようにん

ちしや

い

さと

あき

かん

聖人とも智者とも云うなり。こう解り、明らかに観ずれば、

みやが

こんじよう

うち

ほんがく

によらい

あらわ

そくしんじようぶつ

この身頓て今生の中に本覚の如来を顕して、即身成仏と

言

たと

はるなつ

た

つく

植

あきふゆ

はいわるるなり。譬えば、春夏、田を作りうえつれば、秋冬

くら

おき

こころ

もち

はる

あき

待

は蔵に収めて心のままに用いるがごとし。春より秋をまつ

ひさ

いちねん

うち

ま

う

ほどは久しきようなれども、一年の内に待ち得るがごとく、

さと

い

ほとけ

あらわ

ひさ

この覚りに入って仏を顕すほどは久しきようなれども、

いっしょう

うち

あらわ

わ

み

さんじんそくいち

ほとけ

成

一生の内に顕して我が身が三身即一の仏となりぬるな

り。

どう い

ひと

じょうちゆうげ

さんこん

おな

この道に入りぬる人にも上中下の三根はあれども、同じ

いっしょう

うち

あらわ

じょうこん

ひと

き

さと

く一生の内に顕すなり。上根の人は、聞くところにて覚

きわ

あらわ

ちゅうこん

ひと

いちにち

ひとつき

りを極めて顕す。中根の人は、もしは一日、もしは一月、

いちねん

あらわ

げこん

ひと

延

ところ

詰

もしは一年に顕すなり。下根の人は、のびゆく所なくてつ

いっしょう

うち

かぎ

りんじゆう

とき

まりぬれば、一生の内に限りたることなれば、臨終の時に

いた

もろもろ

見

ゆめ

さ

現

至って、諸のみえつる夢も覚めてうつつになりぬるがご

ただいま

見

しょうじもうそう

ひがおも

僻

目

とく、只今までみつるところの生死妄想の邪思い、ひがめの

ことわり

跡 かた

ほんがく

さと

理はあと形もなくなりて、本覚のうつつの覚りにかえり

ほうかい

みなじやつこう

ごくらく

ひごろいや

おも

わ

て法界をみれば、皆寂光の極楽にて、日来賤しと思ひし我

み さんじんそくいち ほんがく によらい

がこの身が、三身即一の本覺の如来にてあるべきなり。秋の

稲 わせ なかて おくて みつ あ いちねん うち

いねには早と中と晩との三つのいね有れども、一年が内

おさ じょうちゆうげ さべつ ひと

に収むるがごとく、これも上中下の差別ある人なれども、

おな いっしょう うち しょぶつによらい いったいふに おも あ

同じく一生の内に諸仏如来と一体不二に思い合わせてあ

るべきことなり。

みようほうれんげきよう たい

「妙法蓮華經の体のいみじくおわしますは、いかような

たい たず い

る体にておわしますぞ」と尋ね出だしてみれば、我が心性の

はちよう びやくれんげ わ み たいしよう

八葉の白蓮華にてありけることなり。されば、我が身の体性

みようほうれんげきよう もう きよう な

を妙法蓮華經とは申しけることなれば、經の名にてはあ

らずして、はや我が身わ み たいの体にてありけると知りぬれば、我がわ

みやが ほけきよう

ほけきよう

わ み たい

あらわ たま

身頓て法華經にて、法華經は我が身わの体をよび頓し給いけ

ほとけ みこと

わ みさんじんそくいち

る仏の御言にてこそありければ、やがて我が身三身即一の

ほんがく によらい

本覺の如来にてあるものなり。

さと

むし

このかた

いま

おも

習

かく覺りぬれば、無始より已来、今まで思いならわしし

僻 おも

もうどう

きのう

ゆめ

おも

跡

形

ひが思いの妄想は、昨日の夢を思いやるがごとく、あとかた

な

もなく成りぬることなり。

しん

いっぺん

なんみようほうれんげきよう

もう

ほけきよう

さと

これを信じて一遍も南無妙法蓮華經と申せば、法華經を覺

によほう

いちぶ

読

たてまつ

じっぺん

じゅうぶ

つて如法に一部をよみ奉るにてあるなり。十遍は十部、

ひやつぺん

ひやくぶ

せんべん

せんぶ

によほう

たてまつ

百遍は百部、千遍は千部を如法によみ奉るにてあるべき

しん

によせつしゆぎよう

ひと

もう

なり。かく信ずるを如説修行の人とは申すなり。

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經。